この“からだ”にしか、伝えられない“美しさ”が、ある。

ひとに自分の想いを伝えてみたい。誰もがそんな気持ちを持っているのではないでしょうか。コミュニケーションのツールは言葉だけではありません。自分のからだを使って想いを表現して、感動を伝えることもできるのです。また、からだで表現するということは、「自分を解き放つこと」であり、「自分を見つけること」でもあります。生まれながらに二分脊椎症※と先天性側湾や右足頚骨欠損などがある森田かずよさん。前途洋々の23歳のとき、交通事故で右足膝下を切断し義足となった大前光市さん。今回は、お二人のダンサーをお招きして、自らのからだで表現することへのこだわりや喜びを大いに語っていただきました。

森田かずよ(もりた　かずよ) ダンサー、女優。
1977年8月14日、大阪府生まれ。血液型O型。
二分脊椎症・先天性奇形・側湾症を持って生まれる。18歳より芦居を始める。劇団求Q舎、夢歩行虚構団を経て現在フリー。義足の女優・ダンサーとして活動。2001年からコンテンポラリーダンスを学び、自分の作品を創り始める。芦居、ダンスの境界を越えて自分の身体での表現にこだわり続ける。ダンススタジオ「Performance For All People.CONVEY」主宰。2005年、母と共に「NPO法人 ピースポット・ワンフォー」設立。2010年、より様々な人と表現と学びの場創りをしたいと思い、ワークショップデザイナーとなる。2011年8月、第11回北九州&アジア全国洋舞コンクール　バリアフリー部門　チャレンジャー賞(第1位)受賞
http://www.convey-art.com/

Ohmae Kohichi

「足りない」という考えを捨てたとき、光が見えてきました。

大前：ぼくは高校生のときに観たミュージカルに魅せられてダンスをはじめ、大学でバレエに転向しました。劇場の専属ダンサーのオーディションを2日後に控えていた2003年11月30日、交通事故に遭い左足の膝下を切断、以来、義足になりました。もともと楽天的だったのでしょう。ダンサーをあきらめる気持ちはありませんでした。でも、左足を失くして、以前なら普通にできたことができなくなりました。ひとと自分を比べて「負けた感」に打ちひしがれたこともありました。これまでの人生で身につけてきたことがあきらめられず、元の状態に戻ろうとしてもがいたこともありました。自分が自分でないような気がして、それは苦しい日々が続きました。でも、ダンスは決して捨てませんでした。

森田：私も大前さんといっしょで、ダンスに魅せられたきっかけはミュージカルだったんですよ。高校生のころに宝塚歌劇団の公演を観て、私も踊ってみたいと思ったのがスタートでした。私の場合は、先天的な障がいがあって、ほんとうは芸大の演劇科に進みたかったんですが、それも叶わず…。でも、ダンススクールに通ったりしてジャズやモダン、フラなどさまざまなジャンルのダンスを勉強しました。ある障がいのある人向けのワークショップで「ダンスは自由に踊っていい」ということを教えてもらいました。先天的な障がいのある、このからだを使って自由に踊ればいい、ということに気がついたのです。それまで「障がいのない人のように踊るにはどうしたらいいのか」ばかりを考えていたので、目からウロコが落ちました。

大前：そうなんですよね。「自分は普通の人に比べて○○が足りない」という考え方を捨てることから、すべてがはじまるんですよね。それはつまり「ありのままの自分を受け入れる」ということですね。そんな気持ちを持つようになって苦しみから救われました。ぼくの場合は、「失くしてはじめて気がついた」んですね。

大前光市(おおまえ こういち)ダンサー、演出振付家。
1979年生まれ、岐阜県出身。
15歳より舞台芸術に関心を持ち、高校演劇にて活躍後、大阪芸術大学卒業、在学中よりバレエダンサーとして踊る。2003年11月交通事故により左足膝下を切断する。その後モダンダンス、ストリートダンス、ヨガ、日舞、他などを学び自身の動きに反映させる。表現の抽象性と可能性に引かれダンスアーティスト、フリースタイルダンサー(コンタクトベース)として活動。2005年より名前を光一から「光市」に変更。DANCECOMPLEX2008優勝。第47回なにわ芸術祭にて新人賞、大阪府知事賞、大阪市長賞他を受賞。
現在、「ballet sylphides's」所属、「&光市&」主宰、実験的アーティスト集団「Alphact」メンバー
http://sutemi.jugem.jp

※二分脊椎症：先天的に脊椎骨が形成不全となって、本来、脊椎管の中にあるべき脊髄が脊椎の外に出てしまい、癒着や損傷を起こす神経管閉鎖障害の一つ。
脊髄髄膜瘤ともいい、下肢の麻痺や変形、膀胱・直腸障害に因る排泄障害などが症状として出る病気です。

「自分にしか出来ないこと」を見つけて、伸ばしていきます。

大前：左足が義足だと独特の動きになります。これはぼくにしかできないことです。この動きを「カッコよく」見せることができたなら「強み」にすることができるはずです。つまり、自分の特長とか得意なことを見つけ出して、それを伸ばしていけば、「自分らしさ」を生みだすことができるのです。そう考えると、「表現すること」を突き詰めていくと「自分探し」になるような気がします。

森田：私のからだは、明らかに他の人と違います。だから、「違いを受け入れる」ことが「生きる」ことでした。普通の人にはできても自分にはできない…そんなことがたくさんあって、「私には何ができるんだろう?」と悩んだこともありました。でも、考えてみたら、自分で勝手に「自分にはできない」というボーダーラインをつくっていたんですね。「できない」とあきらめるのではなく「できる」ことにチャレンジすればいい。それは、大前さんが言っている「自分探し」につながるのかもしれませんね。

大前：ぼくは、自分を見つけるためには手段を選びたくないんです（笑）。だから、ときには自分自身がとても傷つくことになることもあります。そんな逆境の中に立ち入ってでも、ほんとうの自分に会ってみたいんです。そうすることで「自分らしさ」を実感しているのかもしれませんね。自分自身に自信を持っていれば、他人からどう思われているかが気にならなくなります。それは、とても幸福な状態なんですね。だからこそ、ぼくは傷ついてでも「自分」を探すんです。

森田：私は、常に「障がい」に偏っていないかが気になります。「障がい」を意識し過ぎると、それがひとつのボーダーになってしまうように感じるからです。「障がいがある」「障がいがない」…そんな二元論を超えて、人間として、このからだで表現をしていきたいからです。そういう意味でも、自分にできることは何なのか、ということは常に自問自答していきたいと思っています。

Morita Kazuyo

このからだが大好きです。このからだで感動を伝えたいのです。

森田：他人と比べて、自分のことを嫌いになっている人が多いように感じます。自分に対して愛情が持てないから、自分を大切にできない。自分を大切にできないから他人を思いやることができない…。そんな悪循環が起こっているようにも感じます。誰かに想いを伝えようとするなら、なおのこと、もっと自分に自信を持っていいんじゃないの、と思います。

大前：表現するということは、つまり、「自分の持っているもの」と「相手の持っているもの」とを交換することじゃないかな、と思うんです。あるいは「想い」と「想い」を交感することかもしれない。そのためには、やはり「確かな自分」が必要になってきます。それをつくるためには、「自分自身への愛情」が求められるでしょう。そして、何より「自分自身が幸福であること」が大切です。

森田：誰かと比べて恵まれているから幸せだとか、優れているからハッピーだとか、そんな比較論ではなくて、「今の自分が幸福」と思うことが大事ですよね。「自分の中にしか幸福はない」ということだと思います。さっき大前さんが言っていたように、表現とは「想いの交感」だとすれば、この表現を通じて私たちは「感動」を伝えあっているんじゃないかな、と思うんです。表現って決して発信する側の一方的な行為ではなくて、受けとめる側も何かを発信する、双方向のコミュニケーションだと。ダンスをすることで、私たちもお客さまから感動をもらっているんだ、と思うんですね。

大前：だからこそ、ぼくたちは、このからだを使って、このからだでしか表現できない「美しさ」を伝えていきたいんですよね。そして、関わる人たちみんなが幸福になれるように踊り続けたいと思います。森田さん、機会があれば、ぜひ、いっしょにパフォーマンスしたいですね。

森田：そうですね。できれば、ビッグ・アイで共演したいですね。今日はありがとうございました。

大前：ありがとうございました。

「生きる」～生きるということ、生きているということ～

どんな環境にいても、人はだれしも人とのつながりをもって生きています。過酷な環境でも希望をもって生きている人、そしてそれを支える人がいます。生きているからこそ見つける日々の幸せや夢があり、命をつなぐことができるのだと思います。様々な環境で生きている人を通して、改めて「生きる」ということに向き合い、人の命の尊さや絆、つながりについて考えるイベントを開催いたします。

戦場カメラマン　渡部陽一 トークショー

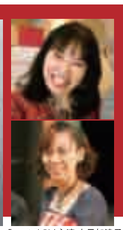
ドキュメンタリー映画　『1/4の奇跡』上映会&トークイベント

3月11日(日)　開場13:30　開演14:00　終演17:45(予定)

■場所　国際障害者交流センター　ビッグ・アイ

入場無料　■全席自由席(手話席・要約筆記席・車イス席あり)　■手話通訳・要約筆記導入

渡部陽一



「1/4の奇跡」主演:山元加津子(上)　監督・入江富美子(下)

お問合わせ　国際障害者交流センター　『生きる』係　TEL.072-290-0962　ikiru@big-i.jp

空飛ぶ車イス、木島英登氏プロデュースのイベントです。

誰もが！　自由に！　行きたい場所に！
ビッグ・アイ トラベルサロン

バリアフリー旅行に関する知恵と情報が集まるトラベルサロン。ゲストスピーカーを招き、「旅行」「外出」「移動」に関する相談会・勉強会を開催します。
テーマ：1月「宿泊施設」、2月「飛行機」、3月「台湾旅行報告」

■日　時　1月13日(金)・2月3日(金)・3月2日(金)
17:00～ 相談タイム、18:30～ 勉強会、20:00～ 台湾旅行の準備
■会　場　国際障害者交流センター バリアフリープラザ
■参加方法　事前申込不要。開催時にお気軽にお越しください。

旅行が好きな方なら誰でも参加可能。途中参加、途中退出、一部参加だけでもOKです。

サロンでは、旅行に関する談話・相談・勉強会を通じて、実際に海外旅行を計画し、実行します。初年度の目的地は台湾(希望者のみ4泊5日：2/23(木)～2/27(月)・10万円程度)

お問合わせ　国際障害者交流センター　トラベルサロン係　TEL.072-290-0962　salon@big-i.jp

学ぶ！　楽しむ！　つながる！
ビッグ 愛カフェ

第5回の愛カフェでは、障がいのあるお子さんと保護者を対象にしたアロマテラピー教室を開催している NPO 法人ナチュラルスペースヴェルジュの安川淳子さんにお越しいただき、アロマテラピー入門講座と自宅・施設で手軽にできるアロマ活用法をレクチャーいただきます。親子で、福祉施設で、お友達と、ちょっとした休憩タイムのコミュニケーションツールにアロマテラピーを取り入れてみませんか?

■日時　2月11日(土・祝)　14:00～17:00
■会場　国際障害者交流センター 研修室
■ドリンク代　500円　■申込締切 2月7日(火)
■講師　NPO法人ナチュラルスペースヴェルジュ　代表 安川淳子さん

お問合わせ　国際障害者交流センター　愛カフェ係　TEL.072-290-0962　cafe@big-i.jp

災害(時要援護者)支援ボランティアリーダー 養成講座のご案内

地域や周辺で大規模災害が発生した時、要援護者を支援するボランティアはどのような行動を起こせばいいのか。また、その時に備え、日頃どのような準備をし、活動をすればいいのか。東日本大震災の報告や、様々な事例を紹介し、参加者が共に「考え」「学ぶ」講座を開催します。

■開催日時　A日程：1月24日(火)13:00～ 25日(水)15:00
B日程：3月12日(月)13:00～ 13日(火)15:00
■開催場所　国際障害者交流センター
■対象者　・市民として地域の防災、災害時の要援護者の支援に志のある方
・平常時から施設や関係機関等で要援護者と関わっている方
・都道府県、市町村、社会福祉協議会職員等
■定員　各日程100名(先着順。定員になり次第締切とさせていただきます。)
■研修費　無料(ただし、交通費、宿泊費、食費等は、受講者負担とします。)
■申込締切　A日程：1月13日(金)必着　B日程：3月　2日(金)必着

内容
●自分が住んでいる地域、もしくはその周辺で大規模災害が起こった時のボランティアリーダーとしての活動について
●避難所における要援護者の支援について（市民としての活動、リーダーとしての活動）
●要援護者の支援から見た防災計画、防災教育

お問合わせ　国際障害者交流センター『災害支援』係　TEL.072-290-0962　saigai@big-i.jp

Present　i-co 読者プレゼント

大橋ひろえさんの著書「もう声なんかいらないと思った」を5名様にプレゼント!

応募方法　郵便はがき、ファックス、電子メールにてそれぞれ、お名前(ふりがな)、ご住所(郵便番号をお忘れなく)、お電話番号、本紙へのご感想やご希望、ご質問などのご意見をご記入いただき、こお応募ください。※読者のみなさまからいただいたご意見を「i-co」紙面でご紹介する場合があります。予めご了承ください。
応募締め切り　2012年1月31日(火)消印有効
※ファックス、電子メールは1月31日午後11時59分送信分まで有効
応募先　〒590-0115 大阪府堺市南区茶山台1-8-1
国際障害者交流センター「i-co編集事務局」プレゼント係
TEL.072-290-0962　FAX.072-290-0972
Eメール：i-co@big-i.jp

編集後記

■今、伝えたいこの気持ち。あなたに届け。私の求愛ダンス!…は誰にも届かないうちに新年を迎えました。あけましておめでとうございます。本年もビッグ・アイをよろしくお願い申し上げます。(は)

■今回の取材で感じたのは「眼力(めぢから)」大橋さん、大前さん、森田さん、お三方ともとても強い「眼力」をお持ちでした。お話をしているうちにグングン引き寄せられるような感覚になりました。それが、みなさんの魅力の源泉のひとつなのでしょうね。うーん、脱帽。(も)

■個人情報の取り扱いについて…
お預かりました読者のみなさまの個人情報につきましては、ビッグ・アイ共働機構が厳重に管理し、本紙の運営・実施の目的に利用させていただき、目的外での利用はいたしません。また、お預かりした個人情報は、読者のみなさまの同意なしに、業務委託先以外の第三者に開示・提供することはありません(法令等により開示を求められた場合を除く)。